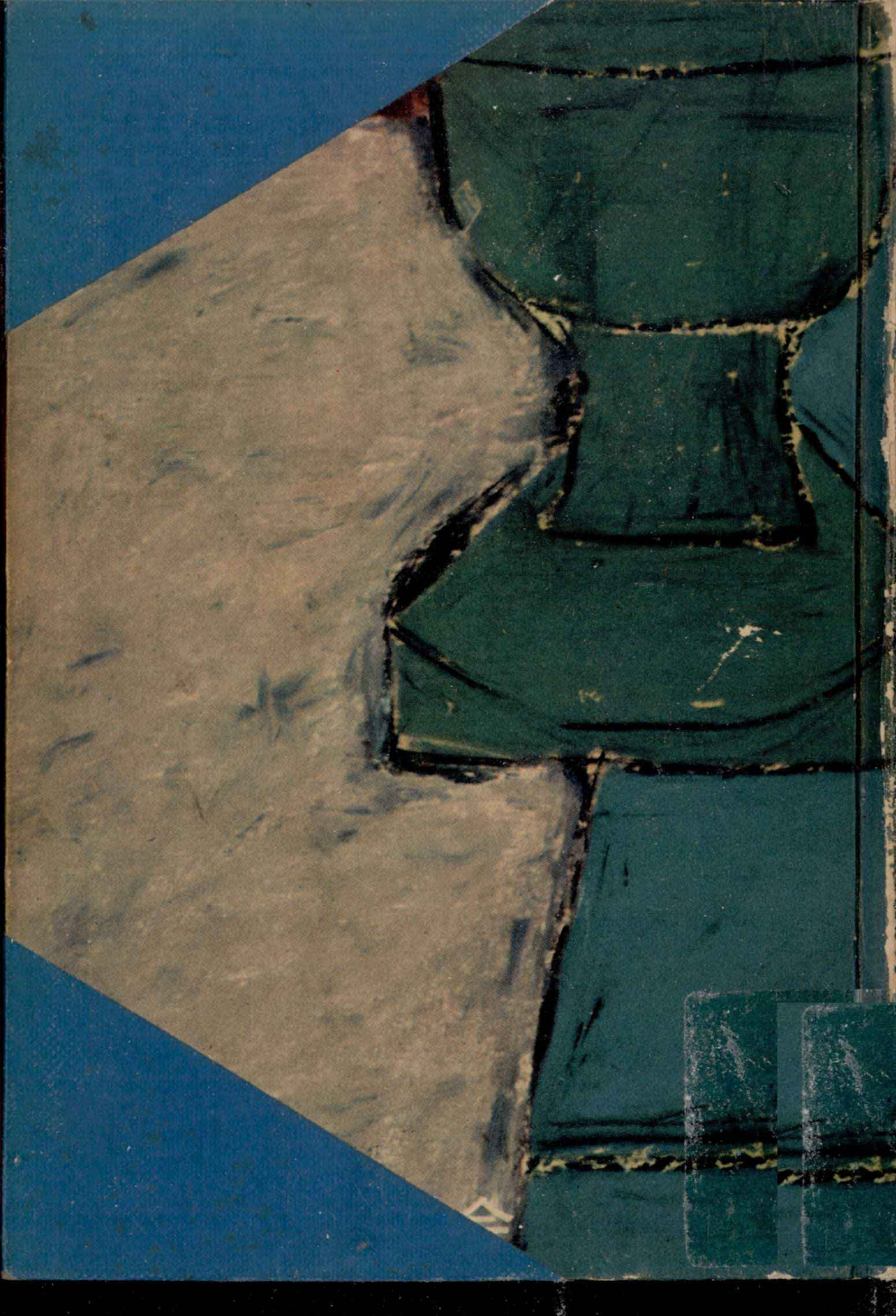




三 文庫

戲 曲 集 二卷



新潮社版

山 本 有 三 文 庫

定 價
貳 百 拾 圓

戲 曲 集 (二 卷)

昭和二十三年八月二十六日印刷
昭和二十三年八月三十日發行

著 者 山 本 有 三

發 行 者 東 京 都 新 宿 區 矢 來 町 七 一
佐 藤 義 夫

印 刷 者 橫 濱 市 中 區 鶴 岡 二 九
小 野 通 久

發 行 所 東 京 都 新 宿 區 矢 來 町 七 一
株式會社 新 潮 社

會員番號 A 二 一 九 〇 四 〇

電 話 九 段 二 一 五 五 番
二 一 五 七 番

東 京 都 千 代 田 區 神 田 淡 路 町 三 〇 九

配 給 元 日 本 出 版 配 給 株 式 會 社

戲
曲
集
二
卷
目
次

同志の人々	二幕	七
ウミヒコヤマヒコ	一幕	五七
本尊	一幕	八
熊谷蓮生坊	三幕	一〇五
スサノオノミコト	二幕	一五九
オ、インがよい	一幕	二〇一

女中の病氣 四場 二七

父 おや 三場 二四九

嘉門と七郎右衛門 二幕 二七九

西郷と大久保 三幕 三二三

霧のなか ラジオドラマ 四〇九

裝
本
・
川
端
龍
子

戲曲集二卷

分類 番号	9126	原簿番号	4852
著者 記号	Y31	登録	1952 年
巻冊 番号	2		4 月 18 日

同志の人々
二幕

執筆
発表
初演

大正十二年三月
大正十二年五月「改造」
大正十四年三月 邦樂座
尾上菊五郎、中村吉右衛門一座

人
物

橋口吉之丞	寺田屋騷動に加担したサツマ藩のさむらい
谷元 兵右衛門	同
林 庄之進	同
有馬休八	同
堤 小兵衛	同
是枝万介	同
吉田 清左衛門	同
永山彌一郎	同
田中河内介(カワチノスケ)	同、中山大納言の家來
その子息 塙磨介(サマノスケ)	同
見はりの役人	

時
代

文久二年五月一日、夕刻から夜にかけて

場
所

船のなか

第一幕

大きな和船の、ものま。

右がわはともの戸だて、左がわは、隔てのかべ板でしきられている。かべ板には出いりの引き戸がついているが、そこから堅く錠がおるされている。

正面は腰のふな板。その上部に、ちいさな窓があいていて、そこから、ゆう日があか／＼と差しこんでいる。部屋のなかに太い柱が一、二本。すべてが古びた感じ。

有馬は立って、窓からそとをながめている。橋口は腕をまくしあげて、谷元に傷を巻きかえてもらっている。堤は退屈そうに柱にもたれかゝっており、林と永山は、黙ってすわっている。是枝は入り口から遠い、すみのほうの柱のかげに腹ばいになりながら、かな物のような堅いもので、しきりにゆか、板をたゝいている。そして、またゆかに耳を押し当てては、何かを聞き取ろうとしている。その近くに吉田がいる。年齢は二十三、四歳前後の者が多い。年長者の永山にしても、三十歳は越していない。髪は皆サツマふうの小便んに結んでいる。たゞし、だれも刀をさしていない。

谷元 (橋口の腕のさらしを解き終えると、窓のところに立っている有馬に) おい、有馬。

有馬 (振りかえり) なんだ。

谷元 少し寄つてくれ。陰になるから。

有馬、無言のまゝ少し寄る。

谷元 (傷ぐちを見ながら) だいぶ肉があがつてきたな。

橋口 (自分も見ながら) うム、おかげで、たいへんよくなった。

谷元 しかし、まだ痛むだろう。

橋口 いや、もう、たいしたことはない。きょうは八日めだからな。

谷元 もうそうなるかな。あゝ、あの晩のことを思うと、むしゃくしゃする。

永山 おい、その話はよせ。もう過ぎたことだ。

谷元、話をやめて、包帯をしかえてやる。

吉田 (ゆかに耳を押しつけている是枝に) どうだ。何か聞こえるか。

是枝 だめだ。

吉田 波が高いせいかな。

是枝 これだけやっているのだから、通じないはずはないのだがな。(またこつこつゆか板をたたく)

谷元 (さらしを巻きながら) 少しきついかな。

橋口 いや、ちようどいい。

谷元 そうか。——さ、これでいい。

橋口 ありがとう。

谷元 (有馬に) おい、まだショウド島は見えているか。

有馬 いや、もうとうに見えなくなつてしまった。

谷元 じゃ、まもなくビンゴナダだな。

橋口 (ひとりごとのように) あゝ、あといく日かゝるかな。

堤 (あくびをしながら) どこへ。カゴシマまでか。

橋口 うム。

堤 わいはばかだな。國へ帰れると思つていいのか。

橋口 おいどんは帰りたくなくても、送り返されるのだから、しかたがないさ。

堤 だから、おめでたいというのだ。わいは自分の行くべきを知らないのか。

橋口 何を言つてゐるのだ。この船は、まっすぐにサツマへ行くのではないか。

堤 おい、國のことを考えるよりも、まあ、辞世の句でも考えておけ。

橋口 よけいな世話だ。辞世なんか寺田屋へ集まる前にちゃんと書いておいた。

堤 ふん。寺田屋か。ばか／＼しい。

橋口 何がばか／＼しいのだ。

堤 わいはあれをばか／＼しいとは思わないのか。

橋口 おい、堤。わいはまじめで言っているのか。あれは、おいどんが、いのちがけでやった仕事ではないか。

堤 だから一層ばかしいというのだ。おいどんはあんなに意氣こんでいたのに、その結果はなんだ。こんなふうに押しこめられてしまっただけではないか。

橋口 おいは、今のことを言っているのではない。あれを企てた精神を言っているのだ。

堤 だめだ／＼。そんなものがなんになる。おいどんは勤王だの、討幕だのと大きな事を言っていたって、いったい何をやったのだ。なに一つしでかしていないではないか。なるほど、われわれは幕府と内通している九條閨白を夜うちするといつて、このあいだフシミの寺田屋に集まった。しかし、かど口から一步も踏みださないうちに、藩から取りしすめにきた者のために、みんな、たゞき伏せられてしまったではないか。

橋口 あれはたゞき伏せられたのではない。君命だというから一時を忍んだまでだ。取りしすめ